
オモイオモワレ

伽砂杜ともみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オモイオモワレ

【Nコード】

N8329E

【作者名】

伽砂杜ともみ

【あらすじ】

セピア色に染まる部屋の中で、まどろむ少女。傷ついた心を癒す場所。イラスト小説企画『小説風景12選』 参加作品です。（9月）＊1つのイラストに、複数の書き手が小説をつける。という企画です。

あなたは、あたし。

まどろみの中で、あたしは揺れる。

思い切って短くした頭だけど、長髪の時が長過ぎて、首元がひどく物寂しい。

全身は鉛がついたように重くて、セピア色の中、深紅しんくに染まったシートが、まるで心の傷から溢れた血のよう。

あたしは、かすれた声で小さく笑った。

「いつまで、ここにいろの？」

ベッドに横たわるあたしに、腰まで伸ばした黒髪をさらりとかぶせながら、彼女が無表情で聞いてくる。

身を起こす事なく、あたしは薄く目をあけた。

「ねえ、もう起きたら？」

うん、でももう少しだけ……

そう口を開いたつもりが、あたしの身体は少しも動かせないでいる。

こうしてても、仕方がないのは分かってる。でも、あと少しだけ……

「こんな事してても、あいつは戻って来ないのよ」

そんな事、知ってるわ。

「万が一、やっぱりお前が一番なんだ。って戻ってきたとしても、絶対に、また繰り返されるわよ？」

知って、いるけど。

あたしの中で揺らぐ何かが、心の中から追いつききれない彼への愛情なのか、ただ悔しいだけなのか。判別がつかない。

またうとうとと、まどろみの奥へと落ちていく。

目が覚めても、夢の中でも、決して救いの手がどこにもないのは分かってる。

「ねえ、ここにいたって意味がない事くらい、分かっているんですよ？ 何の為に、髪の毛を切ったのよ」

黒髪の少女が、ベッドにうつぶせになり、頬杖をついている。

呆れた声。咎めるように、諭すように単調な声が、あたしの脳を打つ。

苦しくて。でも、息をするのも億劫で。

あたしは、あえぐように声を絞り出した。

「自分の、為よ。重い……重たい枷^{かせ}を、外したかったの」

「そうよ、そのはずでしょ？ なのに、どうしてこんな所で沈んでいるのよ。おかしいじゃない」

綺麗な臙脂^{えんじ}の着物が着崩れるのも厭わず、彼女は疲れたように、あたしのベッドに転がって、至近距離であたしを睨^{にら}む。

あたしは、以前にも増して重く感じる頭を上げる事も出来ない。

「もう少しして、いつまでなの？」

髪の毛を短くした違和感が、彼を思い出すきっかけになってしま

っている。

あたしを好きだと、言ってくれた。
あたしを大切だと、言ってくれた。

あたしが家にいてくれるから、帰ってくるのが楽しみなんだって

……

目を閉じてても、さらに手で覆っても、彼の声、彼の温もり、彼の
笑顔が浮かんでくる。

「忘れなよ」

そう出来れば、どんなにいいか。

彼があたしに向けた、あの目が忘れられない。

知らない女と腕を組んだまま、嫌なモノを追い払うように手を振
って、

『お前はもう、いらねーんだよ』

九月の夕涼みには、一緒に浴衣を着て遊びに行こうねって言うて
くれたのは、あなたでしょう？

渋るあたしに、赤い浴衣を買ってくれたのは、あなたじゃない。

あたしは、夕暮れに染まる部屋でセピア色に包まれながら、身体
を丸くする。

「あいつがまた来たらさ、あたしが追い払ってあげるから」

それは、ダメ。でも、ダメじゃない。

彼の顔なんて見たくもない。でも……会いたい。

「絶対にあなたを裏切らないのは、あたしだけ。でしょう?」

分かってる、分かってるの。

頭が重い。頭が痛い。

眠たいの、すぐく。落ち着くまで、眠らせて。

「いいよ。あたしは、ここにずっといるから」

夕闇が、シーツを赤から黒へと染めていく。

目に映る色は、儚く沈む。

身を震わせれば、彼女が手を握りしめてきた。

あたしはその手を握り返す事は出来ないけど、確かな現実を感じながら、目を閉じた。

いつかきつと、忘れられる日がくるのだろう。

笑い飛ばせる日は、きつとくる。

どうしたらいいなんて分からないし、今は何も考えられない。

深みにはまるように、あたしは暗い底に沈んで眠る。

「大丈夫。『あたし』が代わってあげるから」

あの子は、何も聞こえない場所まで沈んだ。あたしはゆっくりとベッドから身体を起こす。

短くなった髪に手をやって、あたしは暗くなった部屋で立ち上がった。

「長い髪の方が、あたしには似合うのに」

着崩れた赤い浴衣を直そうとして、手を止めた。

調子の良い事ばかり言っては、寄生虫のようにあの子の金をあて

にしていた男。

気持ちが悪くなって、赤い浴衣を無造作に床に落とす。
キャミソールとホットパンツに着替えて、安堵した。

暗くなった部屋に、明かりをともす。

男がねだつてはあの子の金で買った物が、散乱している部屋。
窓を開ければ、昼間の残暑を洗い流すように涼しい風が、頬をなでる。

床に落ちたままの浴衣を拾って、ゴミ箱に放り込んだ。

明かりを確認してなのか、呼び鈴がせわしなく押される。

あたしは返事もせずに覗き穴から外を窺い、そのままチェーンをかけた。

あの子の愛しい愛しい彼。

『昨日は悪かったよ。あの女はただの友達だし、冗談で言ったただけ
だろ？』

「消えて。あんたはもう、いらないの」

あたしの声に、あいつは扉をひどく蹴りつけた。

『はあ！？ ふざけてんじゃねーぞ！』

「あたしは真剣よ」

扉一枚へだてて、吹き荒れる嵐のように騒ぎたてているあいつ。
どうしてこんな奴を、あの子は好きなのだろう。

どうしてこんな奴が

あたしの心に、黒い炎が宿った。それは瞬く間にあたしの全身を
支配して、激しい怒りとなってあたしから噴き出しかける。

思うがままに鍵を開け、刃を振り下ろせば気持ちは晴れそうほ
どに。

あの子は、この状況を見てはいないし。聞いてもいない。
ならば、あんな奴がどうなっても構わないではないか。

「そう、全部あなたの為なのよ?」

それでも、あたしは怒りに身を震わせたまま動けない。

扉は目の前にあるし、包丁はすぐそこにあるのに。

あたしがした事は、あの子の罪にもなる。それが分かっているせ
いで、動けない。

「あなたを助けたいのよ。でも、あたしのせいでああなたが犯罪者にな
るなんて……」

扉越しに、しきりに喚いている男の声が一層怒りをあおりたてる。
でも動けないのは。傷つきやすく、純粹に人を信じられるあの子
の為。

あたしは歯噛みした。手をのばせば届く距離にあいつがいるのに。
寒々しい蛍光灯の白い光すらも、腹立たしい。

出来る事は一つだけ。あたしは、怒りをそのまま声にして叫んだ。

「ここはあたしの名義で、あたしの金で住んでるわ! 二度とあた
しの前に姿を見せないで。ストーカーと詐欺で、警察に通報するか
ら!」

何度も扉を蹴り、悪態を吐きながらも、あいつは消えた。
ただそれだけのくだらない男。取るに足らない奴なのに、あの子
は愛していたのだ。

自分の胸に、手をあてる。

「傷つける奴は、あたしが絶対に許さないから。ちゃんと傷を癒して」

あたしは、あなた。

いつの日か、あたしが消える時がくるのかもしれない。

でも今は、ここにいます。あいつに繋がる物は、全て捨てよう。あの子が傷つかないように。

そして、怒りも悲しみもすべて放り出して、心の奥にあるセピア色の部屋の中で、あたしたちはまどろむのだ。

身体を寄せ、お互いを助け合うように、頼るように手を繋いで。

（後書き）

読んでいただきまして、ありがとうございます。

私が書いた物で、明るい作品が多い中、少し暗めな物になってしまいました。

イラスト小説での参加作品です。

一つのイラストに、たくさんの方が小説をつけております。

よろしければ、そちらもどうぞ楽しんでいただけたらと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8329e/>

オモイオモワレ

2010年10月9日22時21分発行